

ヨシ再生と宍道湖西岸なぎさ公園

吉 田 薫

はじめに

生物多様性研究会で訪れた宍道湖のヨシ再生の見学先の一つは、約 10 年前、私が設計に関わった場所であった。計画～工事～現在までの流れを紹介する。

国交省HP資料にあるように、事業は、2000年10月の鳥取西部地震で被災した堤防の災害復旧に合わせ、水辺に近づきやすい緩傾斜の堤防や、水質や生物の生育環境に資するヨシ帯等を整備するものであり、その用地は旧平田市、旧斐川町が無償で提供し、駐車場等の管理も行うというものであった。私は、このうち旧平田市側の農地について担当した。



図 1.事業の概要

出典：国土交通省 HP

工事前の状況（2001年5月）

護岸は5部勾配のコンクリートブロック、堤防の内側（堤内地）には一面に干拓農地が広がり、その傍らには排水用のポンプ場があった。



写真 1.湖岸の様子

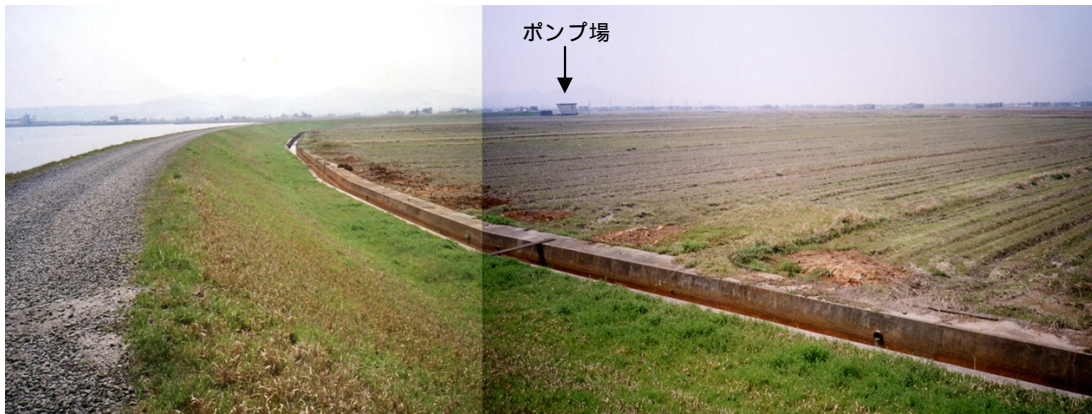


写真 2. 農地の様子

当初は、河川と公園の敷地境界が流動的だったので、ビオトーププランを作成して提出した。これは、湖側はヨシ原やワンドとし、農地側（堤内地側）は水田やメダカ池などをつくるという案であった。しかしこの案は、市側の費用と維持管理の負担が大きいということで不採用となり、湖側のスペースを多くとることとなった。その結果、農地側に残るのは細長いスペースのみとなったが、需要を考えると駐車場としては広すぎる感があった。当時、幅が広すぎる階段等、使われない施設というものは好ましくないと感じていたので、余分なスペース対策として草地、それだけだとつまらないので子供が遊ぶだろうと土盛りづくり、オブジェとして巨石を置いてもらうことにした。今見られるように、土盛りがひょうたん島状となったのは現地でのアレンジであろう。

植栽に関しては、地元によりサクラの苗木が寄贈されるということであったが、水辺に合うこと、いずれはランドマークとなることを理由に、しだれ柳を植えることを推奨した。

レポートでは、湖側との調和を図ることが重要だとし、基本理念を「緑の同調」、「土の同調」、「石の同調」とし、湖側のヨシやヤナギ（緑）、砂浜や堤防（土）、巨石張護岸（石）と対応させた。

工事の様子（2002年9月）

下の写真は工事の様子であり、「夢が広がる水辺プラザ」の工事看板が立てられ、バックホウやダンプカーが稼働している。



写真 3.4. 工事の様子

ヨシ植栽（2003年3月・湖遊館近傍）

宍道湖沿岸では、水環境の再生につながるヨシ植生帯の復活を目指して、NPO法人の主導で小学生らの手で竹ポットを用いたヨシ苗植栽が行われている。写真は湖遊館近傍の活動例だが、各地で同様な場面が展開していることだろう。



写真 5. 竹ポットにヨシと土を詰める



写真 6. 竹ポットを運搬して立込む

植栽4カ月後（2003年7月・湖遊館近傍）

ヨシ植栽後、4カ月ほど経ったときの様子である。離岸堤に砂がつき、湖水と内水面が分離されている。ヨシは内水面において弱々しい姿ながら生育している。



写真 7. ヨシ植栽4カ月後の様子

2005年5月

竣工2年後の宍道湖なぎさ公園の様子である。湖側は砂浜、農地側では土盛りや石組が見られる。また柳が駐車場の横でか細いながらも根付いている。

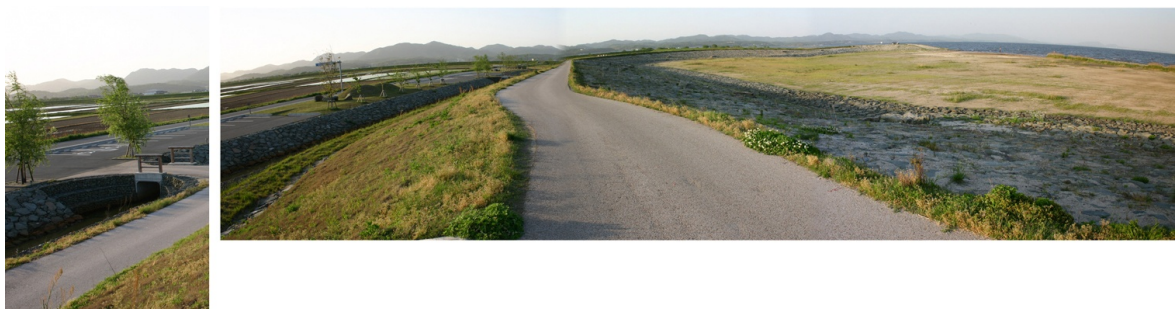


写真 8. 宍道湖なぎさ公園（2年後）

2012年11月

宍道湖西岸の現地を訪ねたのは7年ぶりであった。存在すら忘れていたというのが本音である。湖側の砂浜はヨシで覆われ、手前に残る水面には、時期になれば小魚が遊ぶであろう。生物相は、コンクリート護岸が施され農地であったころよりも、確実に多様化したといえよう。駐車場も冗長なイメージはない。また、柳は大木となり立派にランドマークの役割を果たし、意図した通りとなっていた。



写真 9. 湖側・・・ヨシが繁茂している



写真 10. 農地側・・・駐車場と大きくなった柳

ヨシ植栽について

宍道湖沿岸のヨシの植栽場所について数カ所を見学したが、波浪により浸食されているところもあり、植栽直後から波消しや湖岸保護の役割を期待するのは荷が重すぎるように思えた。それよりも宍道湖なぎさ公園のように、当初は砂浜等の造成をしておいて、基盤ができた後にヨシの植栽を施してその繁茂を期待するという方法が確実である。

NPO法人自然再生センターが推奨するように、防波堤には土木用の網ネットの中に水質浄化作用があるという来待石の廃材を入れた袋詰めを設置する方法も有効であると思う。

提案だが、袋詰めはヨシの定着後に取り除くことにすれば、自然度が高まるし、他の場所に転用することも可能である。一石数鳥のプランとなる。また、袋詰めを用いて離岸堤の間を暫定的に塞ぎ、当初はヨシにとって最適な生育環境を確保するということも考えられる。

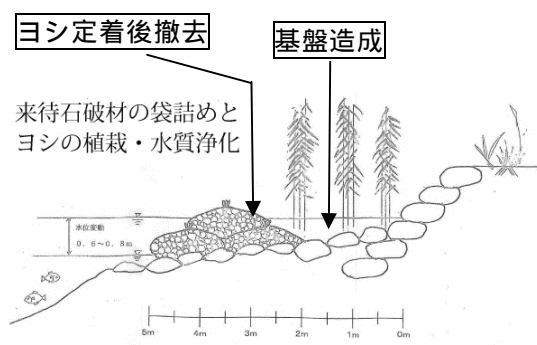


図 2. 自然再生センタープラン

枠書きは筆者

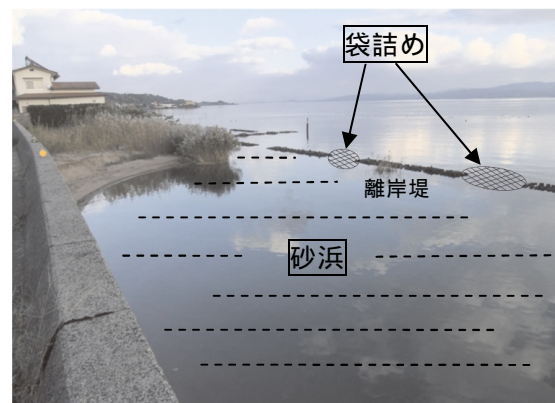


図 3. 袋詰めの利用案